

小中連携の到達目標を意識したやり取りの指導

興津紀子ⁱ, 園田伊公子ⁱⁱ, 坂口瑞穂ⁱⁱ, 柳田章衣ⁱⁱ, 山口耕ⁱⁱⁱ, 荒川ひかりⁱⁱⁱ

Using Can-do Statements for Developing Students' Oral Interaction Skills

Noriko OKITSUⁱ, Ikuko SONODAⁱⁱ, Mizuho SAKAGUCHIⁱⁱ, Fumie YANAGITAⁱⁱ,
Koh YAMAGUCHIⁱⁱⁱ, Hikari ARAKAWAⁱⁱⁱ

1. はじめに

「話すこと」の領域は、一方向のコミュニケーションである発表 (spoken production) と双方向のコミュニケーションであるやり取り (spoken interaction) の大きく二つに分類することができる。発表とやり取りには多くの違いがあるためどちらの領域も指導されるべきであるが、これまでやり取りの指導が十分に行われていない実態があった (文部科学省, 2018, 2019)。そこで対話的な言語活動を一層重視する観点から、小学校・中学校・高等学校の学習指導要領に「話すこと [やり取り]」の領域が設定された。

投野 (2013) は、やり取りは聞き取りの力を必要とする場面が多く、理解に音韻的、語彙・文法的な知識も必要となるため、一方向の産出よりも難しいと指摘している。言いよどみ、ためらい等が頻繁に出現することに加えて、非言語情報を談話の流れの中で正確に汲み取らなければならないことや比較的速いペースで返答しなければならないといった言語処理速度の負担がかかることもやり取りの特徴である。さらに、聞き手は話し手が述べていることを推測・予測するだけでなく、話し手になった際には相手が理解・推測しやすいように調整しながら話す必要もある。このようなやり取りの複雑さに対応できる力を身に付けるために、学習初期段階の小学校から英語でのやり取りの経験を積み、小学校から中学校へと系統的に指導をすることが必要である。

宮崎大学教育学部附属小学校、中学校の外国語活動・外国語部会 (以下、部会) では、小学校から中学校への学びの接続を意識した「話すこと [やり取り]」の系統的な指導の在り方について検討してきた。昨年度は主に Small Talk の活動においてやり取りの力を育成するための7年間の到達目標を設定した (興津他, 2022)。今年度は、その目標の達成を目指して小学校高学年と中学校全学年で Small Talk の指導を実践した。小学校中学年は Small Talk を行わず、単元ゴールの言語活動と毎時間の言語活動において指導を行った。¹本部会では撮影し

ⁱ宮崎大学教育学部

ⁱⁱ宮崎大学教育学部附属中学校

ⁱⁱⁱ宮崎大学教育学部附属小学校

た児童・生徒の発話を書き起こし、発話の質的な分析をした。その上で到達目標の見直し、指導内容の共有と改善について議論した。本稿では部会で共有された到達目標の達成に向けた指導と児童・生徒のやり取りの発話の質的な変容について詳述する。

2. 実践の枠組み

Council of Europe (2020) によると、やり取りには、対人関係 (Interpersonal) の維持に関わる社交的機能をもつもの (例 雑談)、社会問題等を評価 (Evaluative) するもの (例 ディスカッション、ディベート)、情報・サービス・商品の入手といった取引 (Transactional) に関わるもの (例 レストランの店員と客の会話、インタビュー) が含まれ、やり取りが網羅する言語活動の範囲は広い。その中でも対人関係の維持に関わるやり取りができる力は、評価や取引を含むやり取り全般の基盤となり得る。本部会では2021年度より、対人関係の維持に関わるやり取り、特に雑談・世間話といった類いの会話 (small talk) ができる力を系統的に育成することを目指してきた。

文部科学省 (2017) では、Small Talk という用語を活動名として使用し、小学校高学年の外国語科で実施することを推奨している。主に既習表現を繰り返し利用して定着を図ること、会話の開始・終了、相槌、話題の展開や転換といったやり取りを円滑に行うための基本的な表現を学ぶことをねらいとしている。中学校では小学校に先行して Small Talk が実施されており、“One Minute Chat” (ELEC 同友会英語教育学会実践研究部会, 2008) という名称で Small Talk を実施する教員もいる。Small Talk でのやり取りを発達段階に応じて指導し、学年ごとの成果と課題を整理して、7年間でやり取りの力を向上させていくことは意義がある。そういったねらいをもって作成された Small Talk におけるやり取りの到達目標を表1に示す。これは附属中学校教員が作成した草案に小・中各学年担当者が修正を加えた改訂版である。

前年度までの行動リストや方略を適宜想起させ、各学年の新たな表現や方略を提案しながら各学年の担当者が目標達成に向けて指導することとした。

表1 Small Talk におけるやり取りの到達目標 (改訂版, 対話例は省略)²

	到達目標
小学校	指定された基本的な定型表現を用いて、挨拶や個人的な話題についての質問を理解したり使用したりする。また、それに応答する。《CEFR PreA1》 具体的な行動リスト・使用できる方略
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・指定された基本的な定型表現や既習の語句を用いて自分のことを伝える。 ・指定された基本的な定型表現を用いて質問したり答えたりする。 ・相手の顔を見て、伝わりやすい声で話す。 ・教師の合図で基本的な定型表現を用いて会話を始めたり終わらせたりする。 ・相手の発話内容に、数種類の定型表現から適切なものを選びリアクションする。

到達目標	
小学校 高学年	<p>指定された基本的な定型表現を主に用いて、個人的な話題について質問された内容を理解したり使用したりすることができる。また、それに応答することができる。《CEFR PreA1-A1》</p> <p>具体的な行動リスト・使用できる方略</p> <ul style="list-style-type: none"> ・（教師が児童に使用する表現を十分に想起させることが前提となっている中学年から発展させ）教師から提示された表現を使用したり自分で適切な表現を既習事項の中から抽出したりする。 ・相手の発話内容を繰り返したり発話内容に応じた短い感想を述べたりする。
中学校 1年	<p>指定された定型表現や既習の言語材料を用いて、指定された話題について、自分自身や自分の生活に関連する情報を伝えたり、質疑応答を交えながら簡単な意見交換をしたりすることができる。《CEFR A1》</p> <p>具体的な行動リスト・使用できる方略</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指定された話題に応じて、相手に自分のことを伝えたり、相手に質問をしたりする。また相手の質問に答える。 ・伝わる声で話したり、状況に応じてジェスチャーや実物を用いたりして相手に伝わる工夫をする。 ・相手の話した内容を理解して短い感想を伝えたり、関連する質問をしたりする。 ・相手の発話内容に言語的・非言語的なリアクションをとり、さらに質問をして会話を続ける。 ・相手に内容が伝わらない時、適切な語句が出てこない時など、別の語句を使用して伝える。
中学校 2年	<p>定型表現や既習の言語材料を用いて、選んだり指定されたりした話題について、自分自身や自分の生活に関連する情報を伝えたり根拠を加えながら意見交換をしたりする。《CEFR A1》</p> <p>具体的な行動リスト・使用できる方略</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の質問に、根拠を加えながら答える。 ・相手の話した内容を理解して感想を伝えたり、関連する情報提供や質問をしたりする。 ・2文程度の描写や説明をして話題を展開させる。
中学校 3年	<p>既習の言語材料を用いて、日常的及び社会的な話題について、事実と自分の意見・感想に根拠を加えながら意見交換を続け、話の展開に応じたやり取りで会話を終わらせることができる。《CEFR A2.1》</p> <p>具体的な行動リスト・使用できる方略</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の質問に例や根拠を加えて答える。 ・相手の顔を見て相手の理解状況に応じて語彙選択やスピード調整をしたり、ジェスチャーを交えたりして話す。 ・話の運びに応じて会話を終わらせたり、新たな話題を提供して話を続けたりする。 ・ディスコースマーカーを使用するなど結束性を意識して話す。 ・詳しい描写や説明をして話題を深める。

3. 実践

3.1 実践参加者

本実践の参加者は本部会所属教員と、その教員の担当学年である附属小学校3年と6年児童、附属中学校全学年の生徒である。小学3年以外は、毎回あるいは2回に1回程度の頻度で Small Talk に取り組み、担当教員が各自の方法で指導した。小学3年は Small Talk を実施せず、単元目標に「話すこと [やり取り]」の領域を設定した場合に言語活動を通して指導した。

3.2 データ収集と発話分析

3.1 の実践に参加した学年の任意の児童と生徒に、放課後等の授業外の時間を利用して、こちらから指定したテーマで Small Talk を行うよう依頼した。その様子を各学年の担当教員が撮影した。昨年度作成した到達目標には発達段階を示しやすいように全学年「本」をテーマとした対話例を記載していた。依頼した児童・生徒にはその対話例と同じ「本」について、時間制限を設けることなく Small Talk を行うように依頼した。どの学年も直近に「本」をテーマとして扱う単元の学習は行っていない。小学3年生は、授業で扱っていないテーマで話すことは、会話を維持・展開することにおいて困難だと判断し、授業で実施した言語活動と同じテーマでやり取りするように依頼した。その後、児童と生徒の Small Talk の発話を担当教員が書き起こし、到達目標と照らして成果と課題を整理し、今後必要な指導を部会で検討した。本稿では、その中から小学6年と中学2年に焦点を絞り、それらの学年担当教員の指導と児童2名、生徒2名のやり取りを紹介する。

3.3 Small Talk の指導

3.3.1 小学校第6学年の Small Talk の指導

現在の小学6年生は小学5年次から Small Talk を実施している。小学6年担当教員は、児童同士のやり取りの前に教員のスピーチや児童とのやり取りをしている。スピーチややり取りで使用した表現をペアで確認させ、その後全体で共有するなどして、単元終末の言語活動で必要となる表現・語彙への気づきや既習の言語材料の想起の場としている。児童同士でやり取りした後、相手に上手く伝えられなかったことを全体で共有する時間も設けている。どのように言えばよかったかを全員で考え、問題解決を図る過程を経ることで、既習の語句や表現と結び付けて自分の表現を再構築できるような手立てをとっている。さらにコミュニケーションのポイントとして、伝わる声、ジェスチャーの使用、アイコンタクト、表情、反応の工夫について意識させる指導もしている。

3.3.2 中学校第2学年の Small Talk の指導

中学2年担当教員は、教員と生徒のやり取りや教員のスピーチを生徒同士の Small Talk に先行させることは稀であり、1回目の生徒同士のやり取りはあえて既習表現を想起させずに自力で取り組ませている。その後に指導を挟んで再挑戦の機会を提供している。現在の中学2年生は中学1年次から Small Talk を実施しており、担当教員は生徒の習熟段階に応じて指導内容に適宜調整・修正を加えてきた。表2は、中学2年の4月から9月まで、9月から12月までの Small Talk の指導内容である。

表2 中学2年の Small Talk の指導

時期	指導内容
4月から 9月	<p>同じテーマで合計4回（1単位授業に1回）の Small Talk を実施する。4回全て異なる相手と話すようにする。下記の手順を3回繰り返す。4回目はタブレット端末で撮影するよう指示し、その動画を見て発話の自己分析をさせる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 2ペアで互いのペアのやり取りの内容を聞き合うよう指示。質問の内容やリアクションの種類、ターンの回数等をシートに記録させる。その後、相手ペアから返却された自分の記録シートの内容を確認させる。 2) 自分の記録シートに成果と課題、言いたかったのに言えなかったことについて質問を書き、教師に提出する。 3) 教師は毎時間記録シートを回収し、コメントや質問への助言を書き返却する。
9月から 12月	<ol style="list-style-type: none"> 1) ペアで Small Talk をした後、異なるペアから無作為に二人を選ぶ。全員の前で Small Talk を行うように指示する。 2) 1) のペアの発表後に、やり取りに出てきた表現の参考になる点を取り上げて全体で共有する（例 「具体的にキャラクターの名前を出しているので感想を伝えやすくなっていた」「知らないことを伝える時 “I don’ t know.” の前に “I’ m sorry.” があり丁寧だった」「 “No, but I like...” と、 “No.” でやり取りを終わらせないのがよい」）。 3) 話題を掘り下げるのが困難な場合は、教科書の対話文から使用できる表現を探させたり紹介したりする。

4月から9月の指導内容に示した発話の自己分析は中学1年次から継続して実施している。生徒自身が自分は何ができていて、その時にどのように反応すればよかったか等についてメタ認知を働かせて省察し、次回の Small Talk に生かしたり次に挑戦してみたいことを考えたりして自己調整学習ができるように教員が支援している。9月から12月の指導では、一斉面で生徒同士のやり取りを全員で聞くことで各自がクラスメートの発話からアイデアを得たり、自身の発話を省察したりすることができる。また、自分の発話と教科書を往還することで教科書の表現を自分の発話に取り込むことが可能となる。

4. 小学6年生，中学1年生，中学2年生の発話

本章では、3.3の指導を受けた小学6年生2名、中学2年生2名の中学1年次と中学2年次のやり取りを示す。トランスクリプションには西阪（2008）の記号を参照し、児童・生徒の発話の文法的誤りには修正を加えず記載する。（ ）内の数字は沈黙の間合いであり0.2秒以下の短い間合いは（.）と示している。また、::は音声の引き延ばし、（ ）は聞き取りが困難な箇所、（（ ））は注記、[]は発話の重なりを示している。

4.1 小学6年生のやり取り

【抜粋1】に小学6年生2名（S1とS2と表記）の2022年6月末のやり取りを示す。

【抜粋1】 S1とS2の小学6年次 2022年6月のやり取り

01 S1: Hello.
 02 S2: Hello.
 03 S1: How are you?
 04 S2: I'm fine. And you?
 05 S1: I'm good, thank you.
 06 S2: What is your favorite book?
 07 S1: My favorite book is *Shokojo Sara*.
 08 S2: Why?
 09 S1: It's interesting.
 10 (6.0) ((互いに顔を見合わせて))
 11 S1: What is your favorite book?
 12 S2: My favorite book is *Akage no Anne*.
 13 S1: Why?
 14 S2: It's interesting.
 15 My favorite character is Anne.
 16 S1: Do you like books?
 17 S2: Yes, I do.
 18 My, I like books very much.
 19 S1: Me, too.
 20 S2: Nice talking to you.
 21 S1: Nice talking to you, too.

小学6年では1学期に“*What's your favorite sport (subject, animal, color, food) ?*”の質問とその応答を練習する機会がある。また、小学5年の1学期に“*Why do you like music?*”の質問と“*It's fun.*”の応答を練習し、その後もさまざまな場面で“*Why?*”“*It's_.*”の隣接ペアを使用する機会がある。これらの質問－応答を繰り返し使用できる機会を提供してきたことが、6行目と8行目のS2の質問、7行目と9行目のS1のポーズを置かない応答につながっていると考えられる。会話の維持や展開を試みるという点では、15行目でS2が好きな登場人物を述べることで本に関連する情報提供を行っている。さらに16行目でS1が質問を追加したり、19行目でS2の述べた内容に対してS1が同意を示したりする様子もうかがえる。単元で扱っていないテーマでも、定型表現を駆使して簡単な質問と応答を繰り返したり、話題に関連した情報を述べたりするやり取りができている。

4.2 中学2年生の昨年度と今年度のやり取り

【抜粋2】に興津他(2022)で紹介している生徒2名(ここではS3とS4と表記)の中学1年次の2021年12月のやり取り, 【抜粋3】に【抜粋2】と同じS3とS4の中学2年次の2022年10月のやり取りを示す。

【抜粋2】 S3とS4の中学1年次 2021年12月のやり取り

((会話開始部省略))

- 01 S3: Er:: do you like book?
 02 S4: Yes, yes, I like book.
 03 S3: Oh:: what book do you like?
 04 S4: I like *Meitantei Conan*.
 05 S3: Oh, *Conan*. (.) (see) I see.
 06 S4: *Conan* is very interesting.
 07 S3: Yes, interesting.
 08 S4: So:: please, why don't you read *Conan*?
 09 S3: OK. I:: I read. Er, I like *Harry Potter*.
 10 S4: *Harry Potter*. I know I know.
 11 S3: *Harry Potter* is interesting.
 12 S4: Yes. (.) What, who is your favorite character?
 13 S3: Character? Yes, I like:: *Harry Potter*.
 14 S4: Oh, *Harry Potter*.
 15 S3: He can use magic and (.) he is very cool.
 16 S4: Magic? Magic(.) ((magicという単語の意味を考えている様子で))
 17 S3: Yes, magic. *Maho* in Japanese.
 18 S4: Oh, I see. Yes, cool. I like *Dumbledore*.
 19 S3: Oh, *Dumbledore*. I like him. He is kind.
 20 S4: What story do you like?
 21 S3: I like:: all series (.) but I love *Hono no Goblet*.
 22 S4: Oh, that's good. I:: watched:: movie.
 23 S3: Oh, movie. (.) OK, OK. Please read the book.

((会話終了部省略))

小学6年生は“What is your favorite book?”と“My favorite book is____.” “Why”と“It's____.”といった2種類の隣接ペアを繰り返すことでやり取りを展開していた。一方, 中学1年生は, 3行目と4行目の“What book do you like?”と“I like *Meitantei Conan*.”の隣接ペアの後, 5行目ではS3は相手の発話を繰り返し, 6行目と8行目ではS4が感想を述べたりその本を相手に薦めたりする発話が見られ, 隣接ペアを繰り返すことに留まらないやり取りを展開している。さらに, 15行目では尋ねられる前にS3が登場人物のハリーを好きな理由を述べている様子, 16行目でmagicという単語の意味がわからないS4にS3が意味を示してコミュニケーションの破綻を協力して回避する様子, 20行目でS4がハリーポッターの話題をさらに展開させる

「本のシリーズ」に関する質問をする様子など、多様な方法でやり取りする様子が見えてくる。

【抜粋3】 S3とS4の中学2年次 2022年10月のやり取り

((会話開始部省略))

- 01 S3: What book do you like?
 02 S4: Er, I like manga.
 03 S3: Oh, manga. What manga?
 04 S4: Er, I like *Jujutsu Kaisen*.
 05 S3: Oh, *Jujutsu Kaisen*. ((頷きながら))
 06 S4: How about you?
 07 S3: I like *Jujutsu Kaisen*, too.
 08 What's your favorite character?
 09 S4: I like Yuji.
 10 S3: Ah, Yuji.
 11 S4: He is very cool, and he is very strong.
 12 S3: I think so.
 13 S4: How about you?
 14 S3: I like Fushiguro Megumi.
 15 S4: Ah, that's nice. He is very cool.
 16 S3: Yes. He has, er, he use, er, shadows and he, he use *Gyokuken*.
 17 *Gyokuken* is so cool.
 18 S4: Yes.
 19 S3: [Er::]
 20 S4: [Er::]
 21 (7.0)
 22 S4: How about (other) manga?
 23 S3: Huh? ((顔を前に出してわからないことを示す))
 24 S4: Er, how about other manga? ((otherを比較的明瞭に発音する))
 25 S3: Ah, I like, er, (1.0) *Dragon Ball*.
 26 S4: Oh, *Dragon Ball*.
 27 S3: Yes.
 28 S4: It's very popular.
 29 S3: Yes, er, I like *Kamehameha*.
 30 S4: *Kamehameha* ((笑いながら))
 31 S3: *Kamehameha* is so powerful and so cool.
 32 S4: I want to use it. ((笑いながら))
 33 S3: Yes, yes, me too. ((笑って大きく頷いて))
 34 So::
 35 (5.0) ((互いに考えている様子を示す))
 36 S3: If you have, er:::, seven *Dragon Balls*, what do you do?

- 37 S4: I want to get (3.0) the (1.0) free.
 38 S3: Oh, [free] ((うなずきながら))
 39 S4: [free]
 40 I want to get free.
 41 S3: Oh, yes, nice.
 42 S4: How about you?
 43 S3: I want to get many money.
 44 S4: Many money! ((笑いながら))
 45 [That's nice.]
 46 S3: [I love money.] ((笑いながら))
 47 S4: If you get many money, (what do you) want to do?
 48 S3: I want to, er, buy, er, books.
 49 S4: Books. That's nice!
 50 Do you like books?
 51 S3: Yes.
 ((会話終了部省略))

小学6年生、中学1年生、中学2年生のやり取りの共通点は、好きな本から好きな登場人物に話題が展開する点である。事前に表現や語彙を想起させることなく中学生が“**What is your favorite___?**”や“**What___ do you like?**”の表現、**character**という単語を難なく使用できるのは、小学校段階での練習の積み重ねによるものと考えられる。

中学2年生が他の学年と異なる点は、一つの本に関するやり取りが比較的長く展開している点である。25行目で「ドラゴンボール」のタイトルが提示されてから、「好きな登場人物」という定番の流れで会話を運ぶのではなく、「好きな技とその理由」(29-33行目)、「好きな本に関連したアイテム(ドラゴンボール)について、自分ならそれで何をするか」(36-46行目)、「そのアイテムを使って手に入れたもので何をするか」(47-49行目)と、話題を次々に展開させている。既習の文法事項が増えるに従い、定型表現だけに依存せず、**if**(36行目、47行目)のようなその状況に適した文法を選択して文を生成する様子が見られるのが中学2年生の特徴である。

相手が述べたことに対する反応について、相手の発話の繰り返し(3, 5, 10, 26, 30, 38, 44, 49行目)がみられたり、“(That's) nice.”(15, 41, 45, 49行目)“I think so.”(12行目)、“He is very cool.”(15行目)、“It's very popular.”(28行目)といった感想を伝えたりするなど、反応の種類が豊富である。繰り返しについては、相手の言った内容を理解していることを示したり、思いがけない驚きや共感を表す手段として利用したりと、繰り返しにさまざまな意味を含ませながら使用している様子が見られる。

中学2年生では、定型表現と既習の文法事項を駆使して、相手の話した内容を理解してその状況に応じて感想を伝えたり、関連する質問や情報提供をして話題を展開させたりと、中学2年生の到達目標とその行動リストに沿ったやり取りをしている様子が見られる。中学3年生以降で、ポーズを短めにできるような方略を駆使したり、長めのターンの中で物事のより詳しい描写(例 ストーリーの説明や登場人物のエピソード)をして話題を深めたりするなど、より発展的なやり取りができる支援をしていきたい。

5. まとめ

小学校から中学校への学びの接続を意識した「話すこと [やり取り]」の系統的な指導の在り方を検討する試みとして、7年間の到達目標を作成し、その目標の達成に向けた Small Talk の指導を実践した。指導を受けた児童・生徒のやり取りについて質的に分析したところ、学習した定型表現を生かして質問－応答といった隣接ペアを繰り返してやり取りを展開する小学校段階から、状況に応じた既習文法を駆使して文を生成し、1冊の本の話題を多様な方法で掘り下げる中学2年段階まで、発達段階に応じて発話に変化する様子が確認できた。ただし、本稿では任意の児童同士、生徒同士によるやり取りを分析したため、学年全体の状況を表しているわけではない。英語が得意な児童・生徒がいればそうでないものもあるため、今回示したような一斉指導だけにとどまらず、個々の児童・生徒の発話の変容に気づき、成果と課題を整理した上でフィードバックを与えるような支援が必要である。また、小中連携の取り組みは教員間の意思疎通を図り、相互授業参観や合同授業を行うといった過程を経て小中連携のカリキュラムを構築することが可能となる(板垣・古家, 2020)。そのため、今後も時間をかけて効果検証を行いながら取り組んでいく必要がある。

注

- ¹ 学習指導要領において、小学校中学年の外国語活動では既習表現の定着まで求めておらず、既習表現の定着をねらいの1つとする Small Talk は主に高学年以降で取り組むこととされている(文部科学省, 2017)。そのため附属小学校の中学年でも Small Talk を実施せず、やり取りの言語活動の中で到達目標を意識した指導を試みた。
- ² 興津他(2022)で記載した到達目標を具現化した対話例を省略している。

引用・参考文献

- Council of Europe. (2020). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment: Companion volume*. Council of Europe Publishing.
- ELEC 同友会英語教育学会実践研究部会(2008)『段階的スピーキング活動42』三省堂
- 板垣信哉・古家貴雄(2020)「小中連携」小学校英語教育学会20周年記念誌編集委員会(編)『小学校英語教育ハンドブック—理論と実践—』(pp. 78-83)東京書籍
- 文部科学省(2017)「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm (2022年12月10日)
- 文部科学省(2018)『中学校学習指導要領解説外国語編』開隆堂出版
- 文部科学省(2019)『高等学校学習指導要領解説外国語編』開隆堂出版
- 西阪仰(2008)「トランスクリプションのための記号」Retrieved from <http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/transsym.htm> (2022年12月28日)
- 興津紀子・園田伊公子・坂口瑞穂・柳田章衣・山口耕・荒川ひかり(2022)「小学・中学7年間を一貫したやり取りの能力の育成」『宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要』30,119-132
- 投野由紀夫(2013)『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』大修館書店